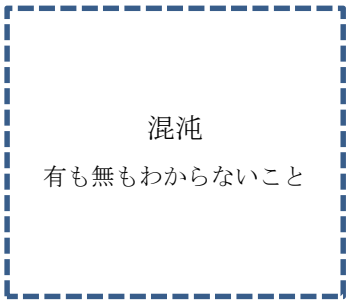
第１章　始まり、混沌からの出発

有無があるということは、それ以前の状態があって、初めて成り立つのである。

有無があるためには、有無は始まらなくてはならない。

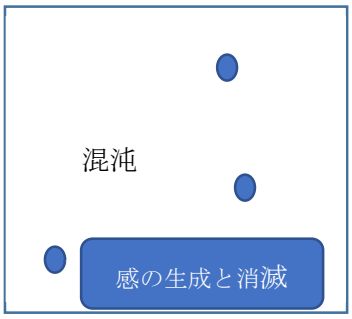


有るということは、感が接続できる事をいう。感が相互に接続すると、基礎関係が出来上がる。基礎関係の両端は、構造になる。有るには、構造が必要で、構造を感じる対象もまた構造である。

混沌から感を作り出す力が、関係を作り出す。感を作る力は、すべての関係の拡大とすべての関係の安定を、もたらす力である。

第１章１項　混沌

何もわからない。有無もわからない。有ると無いが共存し同時に適用できる状態で、時間や空間さえもわからない。



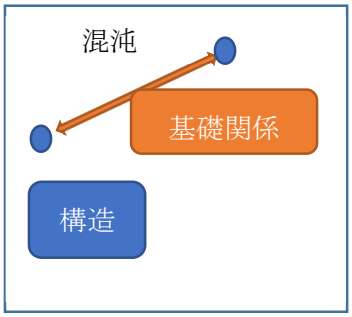
その状態を、混沌という。

混沌の中では、感（感じるとかの意味）が存在しようとすると、混沌が常に打ち消し関係は消滅する。そしてまた消滅が、存在の引き金になる。

第１章２項　基礎関係（場所と時間と事柄の成立）

感を作り出す力が、強くなると、感が、増え始める。

その中で感が双方向につながると、基礎関係ができる。



この基礎関係も混沌により、消滅させられようとする。この基礎関係は、お互い対等な関係である。お互い相手同士の関係である。この時、お互いの関係の両端に、構造が出来上がる。

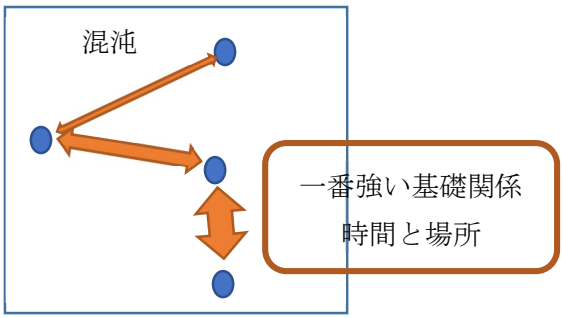
基礎関係が生まれるのも、消滅するのも、混沌の力による偶然が作用する。

その基礎関係が、消滅より新たな基礎関係が多く作られた時（感を作り出す力の増大にあたる）、基礎関係は関連を作り、混沌の中で膨張を始める。

また基礎関係が単数の時は、その基礎関係は絶対である。多数の基礎関係では、一番強い基礎的な関係が絶対的な尺度（場所と時間）になる。

基礎関係が最初、場所と時間を作り出す。

そして、場所という基礎関係と、時間という基礎関係の中で、他との事柄の関係ができる。場所と、時間と、事柄の基礎関係が出来上がる。基礎関係は、新たなる基礎的な関係を繋ぎ関連になる。



基礎関係は、あらゆる方向に広がろうとする。

一番強い基礎関係が時間と場所になる。

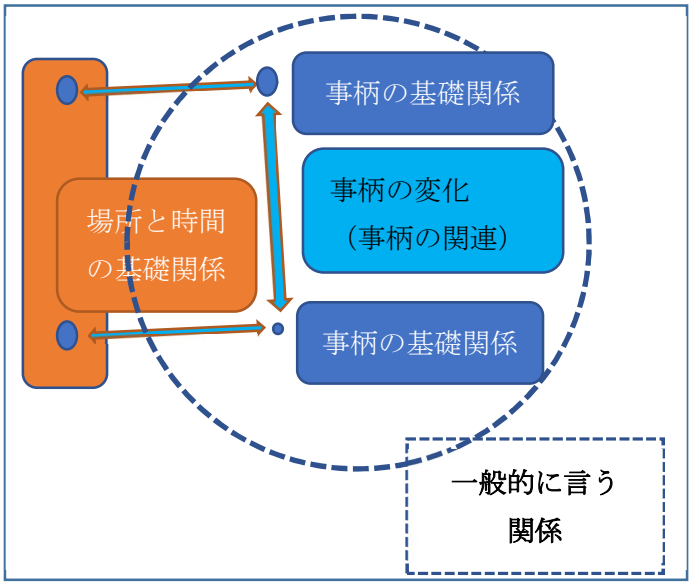
第１章２項補足　場所と時間

場所があり、その場所に対応した時間がある。時間があれば、時間に対応した場所がある。時間が変われば、場所も変わる。

関係としての場所、時間の変化があったとしても、基本的に確認できない。一番強く安定的な関係になる。しかし確認できない。するために必要な、より安定した相対的な対象がない。

場所と時間の二つから確認可能と思うかもしれないが、時間と場所の変化は同時に起こる。時間が変われば場所も変わるし、場所が変われば時間も変わるので、どちらの変化なのか確認できない。ある時間は、ある場所で起こる。別の時間は、別の場所の為、確認できない。

第１章３項　事柄と一般的な関係の成立



事柄とは、時間と場所以外の、関係の対象になる構造を言う。

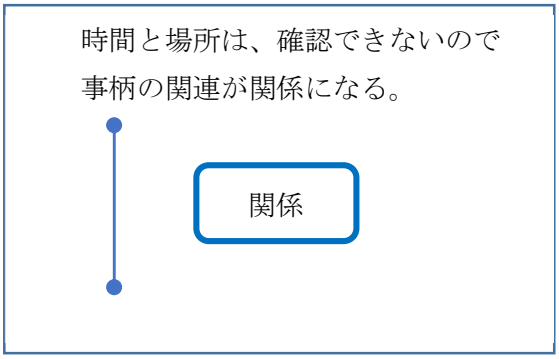
時間と場所も、事柄の構造にあたるが、この２つは、特定の時間と場所を使って、認

識する者にとって、特定の場所の時間と場所を、確認できない為である。

しかし事柄は、確認が可能である。

事柄の関連は、場所と時間の関係を軸に変化する。この変化は、場所を移動したときの変化、時間を移動したときの変化と、混沌が引き起こす偶然による変化がある。

そして、この場所と時間を介して、事柄と事柄の関連も出来上がる。



時間と場所は、確認が困難なため、確認可能な、事柄との関連だけが残る。ここに関係が成立する。

場所、時間と事柄の基礎関係と、事柄と事柄の関連を含めて、関係と呼ぶ。

第２章以降この一般的な関係を、関係として表記する。

第１章３項補足　偶然

果たして偶然といえる事柄は、確認できるか？

私は、この場所で時間に沿って認識しているので、場所と時間の偶然を検証することは、ほとんど不可能である。事柄の偶然を、検証することしかできないと思われる。

事柄に関しては、この場所の時間しか関係しない事柄を、偶然として扱える。事柄が、他の事柄と関係が無い時、偶然にある事柄が起こるように、認識される。

量子力学での光や電子が、検出するまでは靄みたいな状態で、検出したとき初めて、特定の状態を表すような事柄が、当たると思われる。

偶然がある場合、確定的な未来は、存在しない、そして過去も確定的でなくなる。

また時間と場所だけに、関係する事柄も同じである。